

國學院大學学術情報リポジトリ

太宰治「千代女」論：「わからな」い少女

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 樹里 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002340

太宰治「千代女」論

「わからない」い少女—

一、はじめに

太宰治の「千代女」は、「改造」（昭和16年6月）に掲載された短篇小说であり、発表の翌々月には、短篇集『千代女』（筑摩書房）に収録され、表題作となっている。

この物語は、所謂〈女性独白体〉形式の作品である。太宰治は、〈女性独白体〉形式の作品のみを意識的に収録した創作集『女性』（博文館、昭和17年6月）を刊行しているが、昭和16年に発表されたこの「千代女」は、刊行時までに発表された全十篇の〈女性独白体〉作品の内唯一、創作集『女性』に収録されていない。太宰治は、この創作集の「あとがき」で以下のように述べている。

昭和十二年頃から、時々、女の独り言の形式で小説を書いてみて、もう十篇くらゐ発表した。読み返してみると、あまい所や、ひどく不手際な所などあつて、作者は赤面するばかりである。けれども、この形式を特に好きな人も多いと聞いたから、このたび、この女の独白形式の小説ばかりを集めて、一本にまとめてみた。題は、「女性」として置いた。少しも味の無い題であるが、あまり題にばかり凝つてゐるのも、みつともないのである。

齋藤 樹里

「あとがき」には、創作集『女性』の収録作品がどのような意図を持って編成されているかが作者の言葉で説明されている。ここでは、「千代女」未収録の理由は明かされていないが、「あまい所」や「ひどく不手際な所」を自認しながらも、意識的に同形式の作品を収録したことが書かれており、この創作集が瑕瑾のない作品ばかりを集めていた訳ではないことが窺える。つまり、太宰自身が「千代女」を「不手際」な作品であるために創作集から除外したとは言えないのである。おそらく、「千代女」未収録の理由は、この物語が創作集『女性』発刊の約八ヶ月前に刊行された短篇集『千代女』の表題作となっていたという事情に拠るものであると推測できる。

そもそも、前述の通り「千代女」は、短篇集の表題作となっており、後に『姥捨』（ポリゴン書房、昭和22年6月）にも収録されるのである。「不手際」な作品どころか相当の自信作であったとさえ言えよう。とすると、「千代女」は、太宰治の〈女性独白体〉作品、或いは中期作品を考える上で重要な作品の一つであるだろう。にもかかわらず、「千代女」は単独で論じられることが少ない。本稿では、先行研究を踏まえて論点を確認した後、語り手と子の自己認識に着目して、「わからない」さを語る「千代女」の主人公、

和子の在り方の考察を試みる。

二、同時代評・研究史

先ず、ここで「千代女」受容の流れを整理したい。

「千代女」は、同時代評を見る限り、概ね好評をもって迎えられたようである。例えば、初出の翌月に出された「新潮」掲載の石田英二郎評では、「千代女」が「煉瓦女工」の野沢富美子や、「綴方教室」の豊田正子を諷刺した才気煥発な小説³²であると述べられ、同時代に活躍した「書く少女」を「諷刺」したものであると高く評価されている。

同時代の読者には、作中の「寺田まさ子」から豊田正子を、「金澤ふみ子」から野沢富美子を連想するのは容易であったようで、同年同月「三田文学」掲載の「改造」評³³でも、「太宰治の『千代女』は、豊田正子、野沢富美子を狙ふ一少女をテキストとして太宰治一流の世界が繰り広げられてゐる。これなどは太宰を理解するに一番解り易い作品であらう。」と、同時代の「書く少女」の存在を前提にこの物語が受容されていることが分かる。

つまり、同時代において、「千代女」は、豊田正子、野沢富美子といった実在する「書く少女」たち、雑誌「赤い鳥」(作中では「青い鳥」、鈴木三重吉(作中では「岩見先生」、生活綴方運動)といった文脈でこの作品が理解されてきたことを窺い知れる。

「千代女」における一部の作中人物や用語は同時代の人物・出来事を連想させるように仕組まれており、ここからは太宰の明らかなパロディ意識を見て取ることが出来る。とすると、同時代の「書く少女」たちの「諷刺」であると捉えた石田評の読みは尤も

であろう。「千代女」はこれらの同時代の動きをも、物語に含みこんでいるのである。

「千代女」研究においても、綴方を軸としたこの一連の記号について触れるものは多く、木村小夜論³⁴、安藤恭子論³⁵、井原あや論³⁶等が言及している。

一方で、他の〈女性独白体〉作品との比較から「千代女」を批判する同時代評も存在する。例えば「現代文学」掲載の座談会「昭和十六年の文学を語る」³⁷では、大井広介と平野謙が以下のようなやりとりをしている。

大井 太宰治の「千代女」ですね。「きりぎりす」で非難される夫の中に作者自身を含めてゐたのと、綴方の天才少女といふ設定になぞらへた「千代女」は同巧異曲ですけれど、あがり是一段と手際いいが、あんまり楽にやれすぎてゐる。自己批判の苦しみといふやうなものが全然みうけられぬやうな、一種の型ができあがり、それを使ひ安楽にやつてゐるといふ。

平野 それは、さうですね。

ここで、大井は「きりぎりす」(「新潮」昭和15年11月)と「千代女」を同じ位置の作品と見做し、「きりぎりす」の夫と「千代女」の和子に作者である太宰治の影を見ている。その上で、「千代女」の技巧を一応褒めながらも、「自己批判の苦しみ」という創作上の精神の欠如、作品の類型化とそれに伴う「安楽」さを批判するのである。要するに大井は、「千代女」から、技巧面に走り、精神性を忘れる太宰の姿を読み取っているものであり、平野もそれに

同意しているといえよう。

次に、「千代女」研究史の概略へと移りたい。研究史では、「千代女」の和子の〈文才〉や〈書くこと〉等に焦点が当てられてきた。

木村論では、「冷静ならざる回想という形」が和子に様々な矛盾をもたらしたと指摘し、分裂している和子の姿を捉える。そして、和子は結局、「他者の評価によってしか自分の才能を自覚できない不幸、それゆえに不当な評価を受けたために才能に自信をもてなくなった、しかしだからと言って、自分の才能を意識していなかった状態にはもはや戻れない、という不幸」に陥っていたのだと論じている。

一方、ジェンダー論を援用して「千代女」を読み解く千田洋幸^⑧では、「女の言葉」によって語られているはずの「千代女」の物語は、「私」の言葉に対する男たちの管理をたえず呼びこむことによって、いわば、彼らの言葉の引用のモザイクとして織られていくのである」と、和子の言葉が男たちの影響下にあることを指摘している。「このテクストは、一見「男性」的な言語を脱構築するかのような「女語り」という方法それ自体が、じつは男性中心的なイデオロギーの産物にほかならない、という逆説を、読者の前につきつけてみせるのである。」という千田論の指摘は、「千代女」のみならず、太宰治の〈女性独白体〉を検討する上で実に示唆的であろう。

安藤論は、「千代女」に「綴方・小説・俳句という三つのジャンルのエクリチュール（そのほか不随的に日記も）が登場」することに着目し、「問題は、これらの三つのカテゴリーがジャンルとして分類されつつ、その境界が曖昧であること、そして、境界

が境界のまま、これらのエクリチュールが「和子」につきつけられていることにある。」と、曖昧なエクリチュールの境界を指摘、既成の言葉に回収し得ない自己を、書くことによって作り出そうとするものの、自分自身が未だ見えていない少女和子の姿を提出した。

また、井原論は、昭和十年代という同時代に即した読みで「千代女」を考察している。この論では、綴方に関するコードを読み解きつつ、「理想の少女像」である「寺田まさ子」や「金澤ふみ子」から遠く離れて、評価に値しない自分を和子は「駄目」と括っていたのだとし、「私は千代女ではありません」という眩きは、当代の理想的な〈千代女たち〉を飛び越える和子の自立を意味しているのである。」と、「和子の自立宣言」として「千代女」を読み解いている。

〈書くこと〉に着目した青木京子論^⑨は、全篇を通じた登場人物の「ちぐはぐな言動」の繰り返しを挙げ、「千代女」には始終「笑い」と「ユーモア」に包まれていることを指摘、「千代女」そのものが〈ユーモア小説〉と位置付けられるものであり、和子は子供の頃からそれを目指していたのである。」と纏めている。また、「千代女」は「綴方」は書いても「小説」を書くことが出来なかった文学少女について書かれた作品であるという重要な指摘も見逃せない。

櫻田俊子論^⑩は、「和子」の言説は、他者によって自己確立を無理矢理強制させられ、おのずと他者が望む「私」を演じざるを得ない、アイデンティティを模倣し、それからはずれないように生きざるを得ない困惑」を示しており、「千代女」が「他者の評価を与えられた途端、「書けなくなった」少女、他者の評価により、

存在が揺らぐという意味においてスポイルされた少女の言説」であると述べる。そしてそれは、「書けないことを書いている作者の言説、太宰の自意識の在り方の問題でもある」のだと指摘している。

以上、作品発表から現在に至るまで「千代女」がどのように読まれてきたのかを概観してきた。「千代女」は様々な視点から読み解かれているが、先行論は概ね、和子はいかなる人物であるのか、和子の語りは一体何であるのかという、主人公かつ語り手である和子や彼女の語りの在り方を問うているといえよう。この問題を究明するためには、何よりも先ず和子の自己認識を検討する必要がある。なぜなら、一人称で語られる「千代女」では、和子が過去から現在に至るまでの自己をどのように物語化しているかを読み解くことで、和子を位置付けることが可能であるからである。そこで本稿では、和子が「私」をいかに把握しているかに着目して、論じていきたいと思う。

三、揺れる「私」

「千代女」とは、「天才少女」の話ではなく、「天才」或いは「非才」であるとはつきり自己同定できない少女の話なのではないか。

女は、やつぱり、駄目なものなのね。女のうちでも、私といふ女ひとり、だめなのかも知れませんが、つくづく私は、自分を駄目だと思ひます。さう言ひながらも、また、心の隅で、それでもどこか一ついいところがあるのだと、自分をたのみにしてゐる頑固なものが、根づよく黒く、わだか

まつて居るやうな気がして、いよいよ自分が、わからなくなります。私は、いま、自分の頭に錆びた鍋でも被つてゐるやうな、とつても重くするしい、やり切れないものを感じて居ります。私は、きつと、頭が悪いのです。本当に、頭が悪いのです。もう、来年は、十九です。私は、子供ではありません。

「千代女」の冒頭であるが、ほんの数行の間で、「私」は大きく揺れている。自分を「駄目」だと思ひながらも、「どこか一ついいところがある」と自分を信じている。この、どっちつかずのもどかしい状態を抱え、和子は「自分が、わからぬ」いのだという。冒頭のみならず、物語全篇において、和子は常に揺れている。

「低能の文学少女」を自称する和子は、才能のなさを繰り返しながらも、一方で自分がいかに「天才少女」であるかをも語る。この揺れを、前述の木村論は「分裂し矛盾した意識」と表現しており、非常に示唆に富むのであるが、そこからはある一点から過去を回想した際、それが一貫した一つの意識や物語に回収できるといふ一般的な認識が窺える。つまり、統合された意識や姿といったものが背後に想定されているのである。

とすると、自身の揺れを語りながら、「自分が、わからなくなります。」と語る和子も、同様の認識を持つているのだといえようである。つまり和子は、過去の自分と現在の自分を、そして現在の自分の様々な揺らぎを一致させようと藻掻き、その同一化が巧いかにないことに混乱しているのだ。過去の人生を振り返り、自分が「駄目」であること、つまり「低能の文学少女」物語を生成しようとしてもそこに自分の過去を回収できず、翻って「天才少女」物語を生成しようとする挫折してしまう、このように自

己を統一的に語ることの出来ない状況下で、和子は焦りを抱えているのである。

「もう、来年は、十九です」と、自身の年齢を「もう」という時間感覚で捉える姿からも、和子の焦燥を見て取れるであろう。少女は「子供ではありません。」と語るが、とはいえ「大人」であるとも言切れない境界に立ちながら、「私」とは一体何者であるのか」という大きな謎に直面しているのである。

太宰治の〈女性独白体〉が、語る行為自体をも物語の一部として読み取らせる仕組みをもつのだとしたら、自己を規定しようとする和子の語りの動きそのものが、「千代女」の物語の一部なのである。では、和子はどのように自己を規定していくのか。ここで、語り出しへと戻りたい。

和子は「女は、やつぱり、駄目なものなのね。女のうちでも、私といふ女ひとり、だめなのかも知れませんが、つくづく私は、自分を駄目だと思ひます。」と語る。これが、奇異な語りであることは、説明するまでもないであろう。ここで、「女」であること、「駄目」であることの連関は皆無であり、もちろん物語の展開に従って、後にそれらが説明されることもない。つまり、和子は当然のように「女」は「駄目」であると語っているが、「女」≡「駄目」という和子の論理には必然性がまるでないのである。とはいえ、論者は、ここで、太宰のミソジニ的傾向を指摘したいのではない。ここで着目したいのは、「女のうちでも、私といふ女ひとり」という和子の語りの在り方、要するに、自分を語る際に「女」というカテゴリーを求める和子の在り方なのである。その姿は、例えば、「皮膚と心」(『文学界』昭和14年11月)の「私」が、自分を無理に「女」へと自己規定していく様^①へと重なるであろう。

なるであろう。

ここで考えたいのは、現在の和子の位置である。当時の既婚女性たちは、明治民法の元、夫の家に入る訳だが、そのことによつて彼女たちは「○○の妻」「○○夫人」というポジションに自己を規定することが可能となる。しかし和子は未婚であるため誰かの「妻」だと自己を規定することが出来ない。「千代女」の七ヶ月前に「新潮」誌上に発表された「きりぎりす」の「私」は「十九の春に、見合いをし」たとあるから、同時代状況からいっても「来年は、十九」になる和子は結婚を視野に入れて良い年齢であるといえよう。しかし、ここで、柏木の叔父の言葉を思い出したい。

和子は結局は、小説家になるより他に仕様のない女なのだ、こんなに、へんに頭のいい子は、とても、ふつうのお嫁さんにはなれない、すべてをあきらめて、芸術の道に精進するより他は無いんだ等と、父の留守の時には、大声で私と母に言つて聞かせるのでした。

柏木の叔父は、和子が「ふつうのお嫁さんにはなれない」と言う。つまり柏木の叔父は、和子が誰かの「妻」として自己を規定する道を否定しているのである。そしてその叔父の言葉を、和子は憎みながらも内面化しつつあると言える。

叔父さんの言葉が、あたつてゐたのかも知れません。私はその翌年に女学校を卒業して、つまり、今は、その叔父さんの悪魔のやうな予言を、死ぬほど強く憎んでゐながら、或ひはさうかも知れぬと心の隅で、こつそり肯定してゐるところ

もあるのです。私は、だめな女です。きつと、頭が悪いのです。自分で自分が、わからなくなつて来ました。女学校を出たら、急に私は、人が變つてしまひました。私は、毎日毎日、退屈です。

「妻」という位置を獲得できないかもしれない、と心の中で肯定する和子は、それでも自分が「だめな女」、「女」であることを確認していく。また、和子が「女学校を卒業して、つまり、今」という時に當つて叔父の言葉を受け入れてゐること、「女学校を出たら、急に私は、人が變つてしまひました。」と述べていることにも着目したい。和子は、女学生という立場に自己を規定できなくなつた不安定な「今」だからこそ、「自分で自分が、わからなくなつて来」る、という状況に陥つてゐるといえるのである。

四、和子の才能

「千代女」は、和子の才能の有無を軸に解説されることが多いが、そもそも和子に文才は存在するのだろうか。文才とは何か、という問いは簡単に答えを出せるものではないので留保し、ここでは和子の文章がどのように評価されてきたのかに焦点を当てて考えて行きたい。

十二の時に、柏木の叔父さんが、私の綴方を「青い鳥」に投書して下さつて、それが一等に当選し、選者の偉い先生が、恐ろしくくらゐに褒めて下さつて、それから私は、駄目になりました。あの時の綴方は、恥づかしい。あんなのが、本当

に、いいのでせうか。どこが、いつたい、よかつたのでせう。「中略」何だか、あまり子供っぽく、甘えすぎてゐますから、私は、いま考へると、いらいらします。

和子は、「どこが、いつたい、よかつたのでせう」と自身の綴方「お使ひ」の良さがわからない。自分の綴方を「恥づかしい」「あまりに子供っぽく、甘えすぎてゐる」と批判する和子の語りからは、「いま」ならもつと上手に書ける、という気持ちが透けて見える。しかし、この綴方は七年前の作品であり、当時の和子は「子供っぽい」も何も実際に「子供」なのである。「どこが、いつたい、よかつたのでせう。」と述べる「いま」の和子には、選者がこの綴方のどこを評価したかがわかつていない。裏を返せば、和子には綴方に関して目利きがないということになるだろう。

このことは、「春日町」についても同様である。

また、そのすぐ次に、やつぱり柏木の叔父さんにすすめられて、「春日町」という綴方を投書したところが、こんどは投書欄では無しに、雑誌の一ばんはじめのペエジに、大きな活字で掲載せられて居りました。「中略」「春日町」が、雑誌に載つた時には、その同じ雑誌には、選者の岩見先生が、私の綴方の二倍も三倍も長い感想文を書いて下さつて、私はそれを読んで淋しい気持ちになりました。先生が、私にだまされてゐるのだ、と思ひました。岩見先生のはうが、私よりも、ずつと心の美しい、単純なおかただと思ひました。

「雑誌の一ばんはじめのペエジに、大きな活字で掲載せられ」

たことも、「選者の岩見先生が、私の綴方の二倍も三倍も長い感想文を書いて下さつ」たことも、和子の「春日町」が高評価を得た証左である。しかし、和子は、自分の綴方の「値打」を否定する。

学校では、受持の澤田先生が、綴方のお時間にあの雑誌を教室に持つて来て、私の「春日町」の全文を、黒板に書き写し、ひどく興奮なされて、一時間、叱り飛ばすやうな声で私を、ほめて下さいました。私は息がくるしくなつて、眼のさきがもやもや暗く、自分のからだに石になつて行くやうな、おそろしい気持が致しました。こんなに、ほめられても、私にはその値打が無いのがわかつてゐましたから、この後、下手な綴方を書いて、みんなに笑はれたら、どんなに恥づかし、つらい事だらうと、その事ばかりが心配で、生きてゐる氣もしませんでした。また澤田先生だつて、本当に私の綴方に感心なさつてゐるのではなく、私の綴方が雑誌に大きい活字で印刷され、有名な岩見先生に褒められてゐるので、それで、あんなに興奮していらずしやるのだらうといふ事は、子供心にも、たいてい察しが附いて居りましたから、なほのこと淋しく、たまらない氣持でした。

七年前の和子は、自分の綴方が過大評価されているのではないかと疑い、新たな綴方を書くことに不安を覚える。和子は自分の綴方の才能を信じてゐるが、故に澤田先生の評価も素直に受け入れることができない。和子の語りからは澤田先生の胸中は分かり得ないが、ここでは澤田先生がどのような意図を持つて和

子を激賞したかよりも、和子が周囲の評価に「なほのこと淋しく、たまらない氣持」になつてゐることが重要なのである。他者による評価と自己評価との間のズレが、和子をそのような心持ちにさせているといえよう。

和子への評価は、大人ばかりでなく子供たちへも伝染していく。

学校のお友達は、急に私によそよそしくなつて、それまで一ばん仲の良かった安藤さんさへ、私を一葉さんだの、紫式部さんだのと意地のわるい、あざけるやうな口調で呼んで、ついと私から逃げて行き、それまであんなにきらつてゐた奈良さんや今井さんのグルウプに飛び込んで、遠くから私のはうをちらちら見ては何やら囁き合ひ、そのうちに、わあいと、みんな一緒に声を合せて、げびた囃しかたを致します。私は、もう一生、綴方を書くまいと思ひました。柏木の叔父さんにおだてられて、うつかり投書したのが、いけなかつたのでした。

「一葉さん」「紫式部さま」は、共に《書く女》の成功例であるが、和子はその呼び方に「意地のわるい、あざけるやうな口調」を感じる。安藤さんをはじめとする子供たちに本当に悪意が存在していたかは定かではないが、大人たちによる評価や特別視が、子供たちと和子の間に障壁を作る原因となるのも無理はないだろう。和子の「もう一生、綴方を書くまい」という決意は、綴方をめぐる他者による評価が、和子を苦しめることを知った上でなされたものである。

さて、この和子の才能が綴方に限つて発揮されていたことは、

「お茶の水の女学校」に通うことになってから、「作文のお時間」にも、私は気楽に書いて、普通のお点をもらつてゐました。」とあることから窺える。しかし、いつの間にか、和子の才能は、綴方の才能から文才へ、綴方から小説へとスライドされていくのである。

小説が上手になれるだらうか。

小説といふものは、どうしてこんなに、人の秘密の悪事ばかりを書いてゐるのでせう。私は、みだらな空想をする、不潔な女になりました。いまこそ私は、いつか叔父さんに教へられたやうに、私の見た事、感じた事をありのままに書いて神様にお詫びしたいと思ふのですが、私には、その勇気がありません。いいえ、才能が無いのです。それこそ頭に錆た鍋でも被つてゐるやうな、とつてもやり切れない気持だけです。私には、何も書けません。このごろは、書いてみたいと思ふのです。先日私は、こつそり筆ならしに、眠り箱といふ題で、たわいもない或る夜の出来事を手帖に書いて、叔父さんに読んでもらつたのでした。すると叔父さんは、それを半分も読まずに手帖を投げ出し、和子、もういい加減に、女流作家はあきらめるのだね、と興醒めた、まじめな顔をして言ひました。それからは、叔父さんが、私に、文学といふものは特種の才能が無ければ駄目なものだと、苦笑しながら忠告めいた事をおつしやるやうになりました。「中略」炬燵にはいつて雑誌を読んでゐたら眠くなつて来たので、炬燵は人間の眠り箱だと思つた、といふ小説を一つ書いてお見せしたら、叔父さんは途中で投げ出してしまひました。私が、あとで読んでみても、なるほど面白くありませんでした。どうしたら、

綴方と小説が別物であることは、綴方に関する同時代の言説からも窺える。たとえば菊池寛は、綴方ブームの火付け役である豊田正子（この物語に登場する「寺田まさ子」は、彼女を連想させるように名付けられているといえよう）を「思ひ切つて小説家にした方がいいかも知れないね」と述べているが、「思ひ切つて」という語彙選択は、綴方と小説が単純に接続できるものではないことを示している。しかし、和子は、綴方と小説、隔絶のある二つジャンルを、そしてそれらに関する才能を混同しているのである。だからこそ、和子は「小説といふものは、どうしてこんなに、人の秘密の悪事ばかりを書いてゐるのでせう。」と思ひながら、「いつか叔父さんに教へられたやうに、私の見た事、感じた事をありのままに書」きたいと願う。この「ありのままに書」という態度は、綴方の基本方針である。「赤い鳥」（和子の綴方が掲載された「青い鳥」は、この雑誌を想起させるよう仕組まれている）創刊に際して配布されたプリント「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」には、「赤い鳥」には「少しも虚飾のない、真の意味で無邪気な純粹な文章」「空想で作つたものでなく、たゞ見た儘、聞いた儘、考へた儘を、直に書いた文章」を掲載していく旨が書かれている。とすると、和子が書きたいと願うものは、まさに綴方的な文章であることになる。

叔父に非才であると読むのを投げ出された「眠り箱」を、和子は「小説」であると位置付けている。「眠り箱」は、和子の独自の感受性と観察力によって飾らずに書かれているという点で、「お使ひ」や「春日町」と同様のテイストの作品といえるだらう。和

子の綴方の才能は、言語表現の巧みさや文章のレトリックではなく、和子の感受性や観察眼にある。というのも、当時、綴方を評価する上で重視されていたものは、「実感的な表現」、つまり「普通には、目に見えない、人には感じ得ない、又は、ほんやり感じても、言葉に表し得ない、ひそんだ或ものを、鋭敏に受象したものの」だったからである。和子の綴方や小説が、「千代女」の中でその物語内容だけが語られるのも、和子の才能を成立させているものが、文章の技巧ではなく、その感受性や観察眼によっていたためであろう。

綴方の定義を持ち出すまでもなく、小説が和子の言う通り「人の秘密の悪事ばかりを書」くものであるとすれば、「眠り箱」は小説とは言えない。しかし、和子の「眠り箱」が「文学」における「特殊の才能」を感じさせない駄作なのだとしたら、それは七年の年月を経ても和子の作品が綴方の域を出ていないという、その点に問題があるのではないか。

さて、激賞された自身の綴方の「値打」がわからず、小説を「書いてみたいとも思ふ」ようになると「女流作家はあきらめるのだね」と言われてしまう和子の中では、常に自己評価と他者による評価に齟齬を来している。この自己認識と他者認識のズレが、先に述べた自己を統一的に語ることの出来ない焦りと相俟って、和子を混乱に陥らせていたといえよう。和子の他者規定と自己規定は統合されることなく、すれ違い続ける。「お母さん、私は、千代女ではありません。」という、母の言葉の拒絶も、母の思う「私」と「私」の思う「私」の差異を示しているといえよう。つまりここでは、「アイデンティティ」と「ポジショナリティ」の問題が立ち現れてくるのだ。

とすると、和子は二重の苦心を抱えていることになる。それは、一つは「アイデンティティ」の確立であり、もう一つ目は「アイデンティティ」と「ポジショナリティ」の一致である。和子には、「私」とは一体何者であるのか」という問いと、「他者が「私」を一体何者であると名指しているのか」という問いの間で揺れているのである。和子は、自らへの確信も持てず、他者によって作られる「私」を受け入れることも出来ない。

「いよいよ自分が、わからなくなります。」「自分で自分が、わからなくなつて来ました。」という和子の混乱は、「私」を非決定のまま保持することなく、統一された「私」を追求するがゆえに生じるものである。

五、「千代女」と和子

加賀の千代女は、元禄16年、加賀松任生れの俳人である。「千代女」で引用される「ほととぎす」の有名なエピソードは、様々な文献で確認可能であるが、古くは『近世畸人伝・続近世畸人伝』でも確認することが出来る。さて、この『近世畸人伝』は、伴高蹊著、寛政2年8月に京都で刊行された伝記であるが、偉人に限らず近世の様々な階層の人物が記されているのがその特徴である。続編である『続近世畸人伝』は、寛政10年1月、京都の林伊兵衛の外、計六書肆の刊行で、翌年の寛政11年3月、江戸でも販売された。著者は三熊花頭であるが、花頭が寛政6年の8月に未完成のまま歿したため、伴高蹊が草稿に筆を加えて完成させたという。「加賀の千代女」のエピソードは、この『続近世畸人伝』に収められている。

千代女は加賀の松任の人にて、幼より風流の志ありて、俳諧をたしなむ。しかれども其師をえず。是かれ行脚の人にとふに、美濃の廬元坊を称することみな同じ。こゝにして殊更に行て学ばんとおもへるに、折しも行脚して来りしかば、其旅宿に就て相見をこひ、志をのぶ。元草臥れたりとて寐てありし所へゆきて、教をもとむるに、さらば一句せよ、といふ。初夏の比なれば時鳥を題とす。やがて句を吐たるに、元其たゞものならざる気韻を見て、其句をうけがはず、是はたれもすべき所也といふ。さらばとて又一句を吐。なほ肯ざること初のごとし。元は既に眠につけども女はなほさらず、沈吟す。其眼さめたるをうかゞひては又一句をとふ。かくて数句に及び、つひに暁天に至る時、元起て終夜さらざりしや、夜は明たりや、とおどろく。時に千代女、

ほと、ぎす郭公とて明にけり

といへるを大に賞し、是也々々、汝他日此意地をわすることなくば、名、天下にふるはんと、師弟の約をなせり。果して女流にめづらしき此道の高名に至れり。これはまだ少女の時なりけらし。

これが、加賀の千代女の「ほととぎす」逸話である。少女時代の加賀の千代女が、期を得て予てよりの憧れの廬元坊に教えを乞うたこと、そして廬元坊が加賀の千代女の「其たゞものならざる気韻」に才能を見抜いた上で、誰もが詠めるような句ではなく、加賀の千代女の才能に見合った句が出来るまで何度も句を詠ませたことは看過できない。自らの意志で廬元坊の元へ向かった加賀

の千代女は、諦めることなく一晚中句作を続け、遂に褒められる句を作る。加賀の千代女の逸話は、廬元坊の薫陶を受けたという動機付けがきちんと形成された上での「意地」だったのである。一方、和子の母は、動機付けの明確な加賀の千代女の「意地」を、単純な「根気」、辛抱強さの問題へと接続する。

母は時々、金澤ふみ子さんや、それから、他の娘さんでやつぱり一躍有名になつたひとの噂を、よそで聞いて来ては興奮して、和子だつて、書けば書けるのにねえ、根気が無いからいけません、むかし加賀の千代女が、はじめてお師匠さんのところへ俳句を教はりに行つた時、まず、ほととぎすといふ題で作つて見よと言はれ、早速さまさま作つてお師匠さんにお見せしたのだが、お師匠さんは、これでよろしいとはおつしやらなかつた、それでね、千代女は一晚ねむらずに考えて、ふと気が附いたら夜が明けてゐたので、何心なく、ほととぎす、ほととぎすとして明けにけり、と書いてお師匠さんにお見せしたら、千代女でかした！ とはじめて褒められたさうぢやないか、何事にも根気が必要です、と言つてお茶を一口のんで、こんどは低い声で、ほととぎす、ほととぎすとして明けにけり、と呟き、なるほどねえ、うまく作つたものだ、と自分でひとりで感心して居られます。お母さん、私は千代女ではありません。

和子の母は、和子と「金澤ふみ子」や「加賀の千代女」等の「書く少女」を重ね、「和子だつて、書けば書ける」のだと和子の才能を信じて疑わない。だからこそ、和子に欠けているものは才能

ではなく、「加賀の千代女」のような「根気」であると論ずるのである。

しかし、加賀の千代女の逸話と和子の間には大きな差異がある。和子の才能は、その評価が妥当であるかはさておき、柏木の叔父によって否定されてしまった。「なんにも書けない低能の文学少女」には、加賀の千代女における蘆元坊のように、才能を保障してくれる存在はいない。だからこそ和子は、「私は千代女ではありません」と母の言説をきつぱり拒絶している。この「千代女」否定は、自分は「千代女」のような才能を持ち得ていない、つまり、現時点では他者が想像し、規定する「千代女」にはなり得ないのだという、諦めの一言なのではないか。

きのう私は、岩見先生に、こつそり手紙を出しました。七年前の天才少女をお見捨てなく、と書きました。私は、いまに気が狂ふのかも知れません。

和子は、自己の才能を保障してくれ得る岩見先生に、「見捨て」ることのないよう懇願する。とすると、この末尾は、「千代女」になれない和子が、自分を「千代女」として規定するための必死の抵抗のように思われる。「なんにも書けない」和子による、「天才少女」という一見矛盾に満ちた自己規定は、「天才少女」でありたい、「千代女」になりたいという和子の「千代女」願望の表出なのではなかったか。

自分が「千代女」ではないことを語る和子の語りが属するこの物語が、何者かによって「千代女」と名付けられているのは、自己認識と他者認識のズレを端的に表しているといえよう。もしく

は、この物語を「千代女」と名付けたのが他でもない和子であると仮定すれば、自己を「千代女」として規定しようとする和子の願望が反映されているといえる。ここでは事の真相は問わない。重要なのは、自己認識と他者認識を、「千代女」という一点において合致させようとする和子の在り方なのであり、その困難が「私は、いまに気が狂ふのかも知れません。」という狂気発動の予感によって捉えられていることなのではないだろうか。

六、おわりに

先にも述べた通り、和子は、自身の人生を振り返り、語ることによって過去を再定義しようとする。現在の自分と過去の自分を、一貫性のもとで統合しようとする。しかし、それは上手くいかない。和子の混乱は、「私」を非決定のまま保持することのできない、「私」とは一体何者であるのか」という問いに対し、「わからない」とことは「わからない」いのだと割り切ることでできないその点にあるといえよう。

「私」とは、そもそも、振幅を含む不安定な存在である。誰も「私」を厳密に定義することは出来ない。よい「娘」ではない、よい「姉」でもない否定を積み重ねながら語る和子が、確信し、獲得しているのは、自身が「女」であることただそれだけである。だからこそ和子は自身が「女」であることから語り始め、回想が「いま」に追いつくに当って再び自身が「だめな女」であることを語る。そして末尾では、自身を「なんにも書けない低能の文学少女」「天才少女」と、一見矛盾した存在へ位置付ける。しかし、これら相反する自己評価も、共に「少女」であるという点は変わらない。

とすると、和子が否定し、しかしそうなることを希求しているように見える「千代女」という存在が、女流の俳句の世界の習わしとはいえ、「千代」という名前に「女」であることを示す接尾辞「女」を付けていることは示唆的である。「女」であること、「女」になることを希求する和子の姿は、太宰治の他の〈女性独白体〉作品の語り手の在り方と重なるのであるが、この点については別稿を期したい。

〔注〕

- (1) 「姥捨あとがき」(ポリゴン書房、昭和22年6月)には、「巻末の『千代女』は、私の生活を書いたものではないが、いまの『文化流行』の奇現象に触れてゐるやうにも思はれるので、附け加へて置いた。」との記述がある。ここからも、同時代の現象を読み、表現し得たという太宰の自信が窺えるだろう。
- (2) 石田英二郎「六月の小説『改造』」(『新潮』昭和16年7月)
- (3) 無署名「改造」(『三田文学』昭和16年7月)
- (4) 木村小夜「太宰治『千代女論』——回想のありかたを中心に——」(『人間文化研究科年報』平成3年3月)
- (5) 安藤恭子「太宰治『千代女』を読む——エクリチュールの境界をめぐって——」(『日本文学』平成7年5月)
- (6) 井原あや「太宰治『千代女』論——私は千代女ではありませぬ——」(『大妻国文』平成16年3月)
- (7) 高木卓、大井広介、坂口安吾、井上友一郎、平野謙、佐々木基一、宮内寒弥「昭和十六年の文学を語る(座談会)」(『現代文学』昭和16年11月)の一節、「太宰治氏『新ハムレット』

『千代女』より。

- (8) 千田洋幸「千代女」の言説をめぐって——自壊する「女語り」(『国文学』平成11年6月)
- (9) 青木京子「太宰治『千代女』論——「ユーモア小説」を目指していた和子——」(『キリスト教文芸』平成16年3月)
- (10) 櫻田俊子「太宰治『千代女』論——スポイルされた少女の言説——」(『日本文学誌要』平成18年3月)
- (11) 「皮膚と心」における、「女」は「生まれつき」「言えない秘密を持つて」いる、「女」には、一日一日が全部である、「女のこの不埒と浮遊」、「女は、肌だけで生きて居る」といった「私」の「女」論は一般論から逸脱しており、「女」という性に還元できるものではない、極めて個人的な「私」の感覚に過ぎない。「私」は自分を無理に〈典型的な「女」〉の枠に押し込めることで「女」として自己を規定していくのである。「私は、結局は、頭のわるい女ですのね。」という「女」論の結論は、「私」＝「女」という自己規定を「私」が確信したことを示していると考えられる。
- (12) 菊池寛・大木顕一郎・豊田正子「『綴方教室』の豊田正子と菊池寛対談会」(『話』昭和13年11月)
- (13) 鈴木三重吉「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」(『広告用印刷物』「赤い鳥」は大正7年7月に発刊)
- (14) 鈴木三重吉「綴方読本」(中央公論社、昭和10年11月)。三重吉は同書の中で、「綴方は、多くの平浅な人たちが考へるやうに、単なる文字上の表現を練習するための学課ではない。私は綴方を、人そのものを作りと、のへる、「人間教育」の一分課として取扱つてゐるのである。」と述べ、綴方教育が

人間性の涵養に結び付くものであることを主張している。

(15) 「アイデンティティ」と「ポジショナリティ」については、

千田有紀「アイデンティティとポジショナリティ」(『勁草書房』『脱アイデンティティ』、平成17年12月)を参照した。「ポジショナリティ」とは、「他者が私を何者と名指しているのか」という他者との関係から立ち現れてくる自己の位置であり、「自己の斉一性、時間的な連続性と一貫性、帰属性」に由来するアイデンティティとは異なる概念を示す。

(16) 『近世畸人伝・続近世畸人伝』(平凡社、昭和47年1月)

*本文の引用はすべて『太宰治全集5』(筑摩書房、平成10年8月)に拠る。旧字体は新字体に変更した。